

多様性 許容する社会に

夏の高校野球の熱戦は楽しかった。練習で磨き上げた隙のない守備、劣勢にもひるまずタイムリーヒットを放つたくましい精神力、きびきびした攻守交代、勝敗が決した後の満面の笑みや悔し涙。場面ごとにすがすがしい気持ちになる。

面白く感じたのは、球児の

ヘアスタイルだ。野球帽から見える髪の毛の長さや形がだんだん多様性を帯びてきたように感じる。監督が「自分で考えて一番よい髪形にするように」と個性を重んじる指導をしている学校も紹介され、感心した。少し前に、茶髪の地毛でも黒色に染めよという高校の校則が問題視された

が、一方で変化も進んでいるのだろう。

日本社会では長らく同質性を求める傾向が強かった。戦後の高度成長期には人口が都市圏に集中する過程で多くの核家族が生まれ、現代的な生活様式が一斉に全国化した。人と同じが安心という心理が一般化し、同じような物を買って、着る。現実には世帯の在り方は徐々に多様化し、単身世帯や共働き家庭も増えた

が、社会や企業が前提とする「モデル世帯」はあまり変わらない。学校教育は多様性に不寛容で、同質化を推進する役割を担ってきた。

しかし、所得・教育水準が高まる中、個性の尊重は抗しがたい流れになった。スマートフォンで自分のデータを送れば服を仕立ててくれる業者も現れた。イノベーションとは横並びを変え、全く新しい物やサービスをつくりだすこ

とで、同質性と正反対の概念だ。デジタル技術が大量生産・消費のシステムを根本的に変化させている。

個性化が進む甲子園の球児たちは、就職戦線では一斉に黒いリクルートスーツに着替えるのだろうか。若者が生きやすい、多様性を許容する社会になれば、日本経済はきっと強くなるだろう。

(早稲田大大学院教授・川本裕子)